

平賀優子氏の論文「日本の英語教授法史——文法・訳読式教授法存続の意義」は、江戸時代末期から今日まで日本で実践されてきた英語教授法の歴史を説明し、そのなかでもとくに、従来欧米の Grammar-Translation Method と同一視されてきた文法・訳読式教授法が日本でどのように成立し、なぜ長年の批判にもかかわらず連続と実践されてきたのかを明らかにしようとしたものである。

著者は、本論文第 1 章においてまず英語教授法研究の概念を概説し、論考の対象を Anthony モデルにおける Method「教授法」に限定することを明らかにしたのち、1808 年から現代までの日本の英語教授法の歴史を 5 期に分類する。そして、第 2 章において、その分類による第 I 期「文字中心時代①」の教授法たる素読、会読、マスタリー・システム、スコット・メソッド、第 3 章において、第 II 期「文字中心時代②」を代表する欧米式の Grammar-Translation Method、文法・訳読式教授法、グアン・メソッド、直読直解法、グループ・メソッド、第 4 章において、第 III 期「音声重視時代」のオーラル・メソッド、グレイデッド・ダイレクト・メソッド、オーラル・アプローチ、さらに第 5 章において、第 IV 期「言語学理論時代」の認知学習理論、コミュニケーション・アプローチ、ナチュラル・アプローチ、多読プログラム、タスクに基づく教授法などを、成立過程、方法論に即して詳述する。そして、文法・訳読式教授法が成立した明治末期以降の多くの教材の仕立て自体が、基本的に文法・訳読式教授法の実践を重視した形になっており、話し言葉の学習を重視する教授法が導入されてからも、その新しい教授法を文法・訳読式教授法用の教材を用いて実践することが試みられてきたと指摘する。そして第 6 章では、日本の英語教育が教授法中心の時代から、個々の教師の指導法を重視する「ポスト・メソッド時代」に入ったと論じる。論文全体を通じ、「19 世紀末に Grammar-Translation Method は廃れ、New Method に移行した」という欧米の教授法観に基づいた日本の文法・訳読式教授法批判の誤解を丁寧に検証している。

一つの論文において江戸末期から現代までの英語教授法を検証するという大胆な試みのゆえに、部分的に過度の一般化がなされている、社会的背景に関する考察が弱い、第 4 章と第 5 章の教授法の解説が独創性に欠けるきらいがある、議論を教授法に限ったために、指導法として広く実践されている訳読の位置づけがなされていない、などの問題点が指摘されたものの、文法・訳読式教授法に関する議論の独創性は審査員全員の認めるところであった。とくに、Grammar-Translation Method の教材作成者としての Ollendorff の位置づけ、および、文法項目を学んだ後にそれを含む単文を翻訳していく Grammar-Translation Method と文法説明ののちに長い文章を訳読していく文法・訳読式教授法との差異に関する、具体的な教材の分析を伴う説明には説得力があり、日本の英語教育に多大な示唆を与えるものと判定された。

以上の審査結果により、本審査委員会は、本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。